ふるさとから学ぶ会／会報
Y.F.O
Y湧別町 Fふるさとの Oお空
第37号(2019年10月1日発行)
“第9回ふるさと講座のお知らせ号”
編集・発行
ふるさとから学ぶ会
代表・梅田 090-4922-5933

酪農は、町を支える重要な産業

「農・漁業の販売総額の４割以上は“生乳”です」

第９回ふるさと講座のテーマは「酪農」です

十勝の酪農とアニメーションの創成期を舞台にした“連続テレビ小説「なつぞら」”が、終わってしまいました。ドラマは、酪農が大きく変わろうとするところでした・・・

湧別町で本格的に酪農が行われるようになったのは、戦後の昭和30年代で、一戸当たりの飼養頭数は４～５頭で、乳牛は放牧飼いで手搾りでした。サイロの普及や配合飼料により乳質が向上、バルククーラーの導入やローリー車により生乳の保全と集送が合理化され、ミルカーの導入によって、多頭飼養が進みました。昭和50年代には、一戸当たり数十頭になりました。平成に入り多頭飼養は更に進み、「2015農業センサス」によると、１経営体（「一戸」といわない）当たり116頭となり、法人化により数百頭を飼養する酪農経営もめずらしくない状況です。

湧別町は、オホーツク管内で一番多くの乳用牛を飼養（18,353頭「2015農業センサス」）し、100億円を超える生乳の販売額は、農・漁業の販売総額（平成30年度 232億円）の４割以上を占めています。

第９回ふるさと講座は、町を支える重要な産業であり、大きな変革期を迎えている酪農について、現場を担い実情をよく知る講師の方から学びます。貴重な機会です。ぜひ、ご参加ください。

第９回ふるさと講座「酪農」

＜第１部＞「湧別町の酪農のあゆみ」（30分）
講師　野 田 直 人 さん（ＪＡゆうべつ町参事）
＜第２部＞「酪農への思いを語る」（80分）
・酪農を夢見て北海道へ
講師　松 浦 三代紀 さん（酪農家）
・昭和・平成・令和～獣医師として、酪農への思い～
講師　増 田 悦 郎 さん（オホーツク獣医師会会長）
・酪農家の願いをまとめ経営を支える
講師　友 澤 勇 司 さん（ＪＡゆうべつ町組合長）
＜第３部＞「感想。意見交換」（15分）
司会進行　渡 来 和 夫 さん（ふるさとから学ぶ会）

共催　ふるさとから学ぶ会
湧別町教育委員会
協力　ＪＡゆうべつ町　ＪＡえんゆう
湧別町農政課

○実施日
令和元年１０月２６日（土）
午後１時３０分～午後４時
（受付　午後１時～）
○会場　ＪＡゆうべつ町 2階大会議室
（４号線・Ａコープ斜向い）
○参加費　無　料
○申し込み
教育委員会社会教育課へ
（TEL　５－３１３２）
☆締め切り
１０月２２日（火）（諸準備のため）

＜　酪農ヘルパー制度　～休日導入で近代的酪農に～＞

「休日導入で 近代的酪農めざす」の見出しで、町の広報（旧湧別町広報ゆうべつ1992.5月号）が酪農ヘルパー利用組合設立の特集を組んでいます。「ヘルパー制度が出来て、子供が喜んでいます。学校の休みにぶつけて、一泊旅行をして子供とのふれ合いを深めたい。」「ヘルパーの人も慣れた人なので、安心して仕事を任せられる。」（酪農家の声が、期待の大きさを伝えています。）

“酪農ヘルパー”は、酪農に従事する人の過重な労働条件を緩和し、ゆとりある経営の実現のために、酪農家が定期的に休日を取ったり、突発的な所用ができた時に、酪農家に代わって、搾乳などの飼養管理を行う制度です。

北海道は、平成２年度から基金を設け、酪農ヘルパー利用組合の設立、運営の支援を始めました。当時「飼養頭数の拡大に伴って、基幹従事者一人当たりの労働時間は、年間2800時間に達する」（「開基百年上湧別町史」）といわれ、平成４年（1992年）には、上湧別（３月77戸）、湧別（４月120組合員）で、酪農ヘルパー利用組合が設立され、事業が開始されました。

酪農ヘルパー制度が発足して、今年で27年になります。ＪＡゆうべつ町広報誌（2017.6）に、一昨年（平成29年）４月28日に開催されたヘルパー利用組合の総会の記事が載せられています。「平成28年度のヘルパー利用状況は・・・過去にないほどの出動実績となりました。・・・希望日にヘルパーが取れず、ご迷惑をお掛けしました。・・・酪農家の高齢化や規模拡大に伴う労働者不足等により・・・酪農ヘルパーの役割は年々大きくなっている・・・」

（U）